

土器以外の遺物としては、鞋形があげられる。総数182点のうち、古墳後期123点、同前・中期14点であり、弥生時代2点、奈良時代25点、平安時代9点で、遺構ごとでは、D69の87点が最多、次いでD46から20点、D34から10点となっている。

焼成粘土塊は、総数102点のうち、古墳後期が72点を占め、弥生時代6点、奈良時代5点、平安時代10点で、遺構ではD72の69点が最多であった。

## 5 奈良平安時代

萱田編年（藤岡1990）に基づき8～9世紀に属すると見られる住居跡は、22軒と考えた。須恵器の坏が多数を占め、土師器のロクロ坏が出現しない萱田Ⅰ期（8世紀前半）に相当するのは、D43、D38であろう。萱田Ⅱ期・Ⅲ期（8世紀後半）は、D38を切るD37が考えられる。D37は、坏についてはⅠ期と同様であるが、第189図6の上部器の壺が削りの採用された常縦型と考えられ、Ⅱ期のメルクマールとなる。D37・D38は、ともに替えの痕跡があり、その連続的な変遷に興味が持たれる。D39の第193図1の壺も削りの採用された常縦壺かもしれない。土師器の箱型のロクロ坏が出土し、須恵器も比較的多く認められるD21、D71はⅡ期、須恵器が少ないD26、D31はⅢ期であろう。その他、D45、D44、D68がⅠ期～Ⅲ期に所属すると考える。D60は、根柢が弱いが須恵器が卓越する8世紀前半の可能性があると考えた。このように8世紀の住居跡が12軒あり、D37・D38のように重複する事例もある。第7次本調査区域などでも8世紀代の住居跡が多く、遺跡全体で合計39軒となる。本遺跡は、この時期の資料が特に充実していると言うことができる。

IV期・V期（9世紀前半）と考えられるのは、内面黒色処理の坏や上部器ロクロ坏の形態から、D16が相当すると考えた。V期のメルクマールとなる土師器皿形土器を伴うのは、D20、D58、D65、D59、D23である。D62は、灰釉陶器が伴っており、VI期以降であろう。

VII期～VIII期（9世紀後半～10世紀前半）の様相が認められるのは、D36、D40、D42である。土師器坏は口縁が大きく外反するものが多く、壺の口唇つまみ出しは直立から内傾へと変化する、須恵器がほとんど見られなくなる、などの特徴的様相が認められる。

墨書き上器については、第290図にまとめた。仏教に関連する「如來（來）佛」（D23特殊遺構）が注目される。同じ墨書きは、第1次本調査でも1点出土している。「佛」字の墨書き上器については、千葉県内の集成がある（糸川2003）が、「如來佛」という類例は無く、貴重な事例を加えることができた。量的には「p」に似た記号の墨書きが多い（D23、D58）。「丈」（F9-18G）は一字であるが、「丈部」と関連があるのであろうか。

仏教関連遺物としては、銅碗（D71）、墨書き「如來佛」、鉄鉢形土器（D23特殊遺構）がある。8～9世紀の仏教布教活動（笛生2005）の一端を示す好資料である。

鉄製品は、合計72点出土し、うち奈良時代30点、平安時代22点、古墳前・中期7点、同後期4点で、器数は、刀子が25点、鎌5点、釘・棒状品31点などであった。刀子の中に柄の木質が残る良好なもの（D43、D71）が、鎌の中には小型の事例（D61）などがあった。また、D21・D45から出土した馬具も市内では貴重な事例である。

鉄製品と関連のある砥石が各種出土し、類例の蓄積ができた。出土数17点うち10点を図示した（D53、D76、D21、D58、D40、D49、M13、F8-60G）。

製鉄に関連する遺物は、D23特殊遺構から、槌形滓、輔の羽門が出土した。槌形滓は、他にD58、M11北西・南東溝、M13溝、M18溝で出土している。鉄滓は全体で39点出土し、D23が22点と最多、D24など古墳後期6点、D21から2点などであった。また、D23からは、銅が付着した坏の破片が出土しており、これも特筆される遺物である。













































